

コミンテルンの日本像 (一九二九—三一年)

——「世界綱領」と「三一年政治テーゼ草案」——

加藤 哲 郎

小論は、近く発表する予定の別稿「『三一年テーゼ』の周辺と射程——コミンテルンの『中進国革命』論」(仮題)の前提となりまた相補うものとして、「単一世界政党」であったコミンテルンが、一九二八年九月の「世界綱領」採択(第六回世界大会)を機に、わが国についてのそれまでの見解(日本支部⇨日本共産党に与えた「二二年綱領草案」)↓「二七年テーゼ」のブルジョア民主主義革命戦略)を改め、「三一年政治テーゼ草案」に定式化される「ブルジョア民主主義的任務を広汎に抱擁せるプロレタリア革命」の戦略を構想するにいたる背景を、コミンテルン自身の側から検討するものである。周知のように、この「政治テーゼ草案」は、一九三〇年夏のプロ

ロフィンテルン第五回大会のころ、モスクワのコミンテルン東洋部のヤ・ヴォルクによって起草された日本問題についての草案を、風間文吉が三〇年一〇月の帰国にあたり口頭で伝授され、風間の帰国後再建された日本支部⇨日本共産党中央委員会により三一年四—六月の『赤旗』紙上に発表されるものであるが、このころには既に、コミンテルン自身の側は、わが国についての戦略を、翌年の「三二年テーゼ」に定式化される「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命」へと転換⇨復帰しつつあることになる。小論が扱うのは、その前段階としての、何ゆえにコミンテルンは、一時的にしる、わが国にプロレタリア革命戦略を与えるにいた

ったのか、という問題である。

(1) 拙稿「コミンテルンの綱領問題——世界政党とイデオロギー的統合」(一)―(四)、名古屋大学『法政論集』第八〇―八三号、所収、参照。

(2) こうしたコミンテルンの日本問題についての基本資料については、さしあたり、山辺健太郎編『現代史資料』第一四巻、みすず書房、一九六四年、参照。

(3) この過程については、さしあたり、五十嵐仁「戦前日本における革命戦略の形成——『三二年テーゼ』作成に至る経過と背景」、『法政大学大学院紀要』第三号、参照。

一 「中進国」としての日本像

一九二〇年代後半から三〇年代はじめにかけて、わが国論壇では『戦略論争』とよばれる学問的にして政治的な一論争が展開された。よく知られているように、野呂栄太郎や雑誌『マルクス主義』『プロレタリア科学』に集う理論家たちが、コミンテルン日本支部Ⅱ日本共産党のいわゆる「二二年綱領草案」や「二七年テーゼ」に依拠してブルジョア民主主義革命(二段)戦略を主張したのに対し、猪俣津南雄ら『労農』グループが、「二七年テーゼ」の独特な解釈にも依拠して社会主義革命戦略を

主張した、かの論争である。

この論争に一石を投じたのは、一九二八年九月一日、コミンテルン第六回世界大会最終日に採択された「共産主義インタナショナル綱領」(「世界綱領」)の第四章第八節「プロレタリアートの世界独裁のための闘争と革命の基本類型」に定式化された、革命類型論であった。それは、「プロレタリアートの独裁へ移行する条件と道」を、資本主義経済発展度を主たるメルクマールとして、世界各国を、①先進国(アメリカ、ドイツ、イギリス、等)、②中進国(スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国、その他)、③従属国(アルゼンチン、ブラジル、等)、④植民地・半植民地(中国、インド、等)⑤超後進国(アフリカの一部、等)、に区分し、①について「プロレタリアートの独裁への直接の移行」、②④について「反封建反帝ブルジョア民主主義革命」、⑤について「プロレタリア独裁諸国の援助による「非資本主義的発展」、という戦略を提示した。ところが、②中進国については、当初の草案(ブハーリン起草)では「一九一七年までのロシア、ポーランド、その他ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化」とさ

れており、スターリンも支持していたのであるが、ポーランド共産党、ドイツ共産党、ブルガリア共産党、等の反対により、「世界綱領」では、「これらの国々のあるものでは、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への多かれ少なかれ急速な成長転化〔中位a型〕、また、他のものでは、ブルジョア民主主義的性質の任務を広範に伴うプロレタリア革命の型〔中位b型〕』という二つの革命類型を併記し、しかも、草案の例示国から「一九一七年のロシア」を削除し「スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国、その他」と大幅に増やし、かつ、これらのどの国がいずれの類型に属するかは明示しない、という定式化がなされた。⁽¹⁾

第六回大会直後の段階では、この「世界綱領」と各国支部に各国共産党の革命戦略の關係はなお問題が顕在化していなかったから、第六回大会に参加した日本支部に日本共産党代表で同大会でコミンテルン執行委員に選出された佐野学は、モスクワで書いた二八年一〇月の『KI』誌上の論文では、カトウの筆名で次のようにのべていた。これは、前年の「二七年テーゼ」の有効性を前提にした議論であった。

「来るべき日本のブルジョア・デモクラシー〔革命〕は、中段階の、資本主義発展段階の国々や殖民地及び半殖民地諸国におけるブルジョア・デモクラシー〔革命〕とは次の事実によってその趣を異にするものである。即ちプロレタリアートが、地主との政治的同盟において覇権を握る帝国主義的ブルジョアジーとの激烈なる正面衝突における指導勢力としてこの〔変〕革を遂行するといふこと及びこの変〔革〕が必ずや急速に実際においてはそれがプロレタリア〔革命〕の端緒を意味する程急速にプロレタリア〔革命〕に転化する。……日本はプロレタリア世界〔革命〕の発展過程におけるブルジョア・デモクラシー〔革命〕の独特な型を成すものである。⁽²⁾」

しかし、このような「独特な型」規定は、コミンテルンの「世界政党」としての性格と、現代の『共産党宣言』とまで自讃された「世界綱領」についてのコミンテルン側の位置づけからして許されるわけはなく、モスクワ滞在中の佐野は「日本革命ノ性質ニ付テ、『ブルジョア』民主主義革命ト云フ見地ニ余リ捉ハレ過ギテ居ル、日本革命ハ『プロレタリア』革命トシテ発シ、其革命過

程ニ於テ『ブルジョア』民主主義的任務ヲ解決スル可能性ガ多イノデアアル、『プロレタリア』革命ト云フ觀察点ヲモツト強ク持タナケレバナルヌ」、即ち「中位b型」であると、『コミンタール』ノ同志カラ屢々忠告サレることになる。⁽³⁾そして、彼自身も、三〇年一月には、「私ハ『コミンタール』綱領草案ノ討議ヤ綱領成文ヲ参照シテ考ヘタ結果」、日本ハポーランド革命と同様に「中位b型」であるという見解に到達したことを、特高警察の取り調べに對して答えている。⁽⁴⁾

この問題——コミンテルン「世界綱領」の革命五類型中の日本の位置——に早く注目したのは、猪俣津南雄であった。猪俣は、一九三〇年三月の論文で、「比較的最近にわれわれが手にした重要な一文献は、プロレタリア戦略論の中心問題の上に多くの光を投ずるものである」として、その文献に「世界綱領」の革命類型論に言及し、日本を「中位b型」だとする。

『プログラム』は、スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国というがごときものによって代表される『中位の資本主義発展段階』の諸国のある者においてさえ、『ブルジョア民主主義的性

質の広範圍の諸任務を伴うところの、プロレタリア「革命」……の存在を認めている。……これは、農業における半封建的諸關係の残存の著大なることや、国家・政治機構における封建的残存物のあることによつて直ちに、当面の「革命」段階をブルジョア民主主義「革命」の段階と考えることのいかに誤れるかを決定的に示すものである。⁽⁵⁾

これに對して、同じころ、『プロレタリア科学』の側は、「二七年テーゼ」ブルジョア民主主義革命」を金科玉条として、「世界綱領」を解釈する。

「思ふに、我國に於けるソレを広く、世界的に分類するとすれば、謂はば、比処〔「世界綱領」で云つてゐる『前者』の範疇〔中位a型〕に入れて考へて差支えないであらう。『労農派』の『戦闘的マルキスト』論客諸公は、上掲文に云ふ、後者〔中位b型〕の風のものとして……ソレを主張してゐる。⁽⁶⁾」

しかし、わが国において、両派が共に『國際的權威』に依拠して「二七年テーゼ」と「世界綱領」を結びつける解釈論争を展開していたころ、當の『國際的權威』コミンテルンの側は、「二七年テーゼ」を再検討し、「世

界綱領」を基準とする新たな戦略作成に入っていた。そして、両派によって共に日本は「中進国」と認められたわけであるが、「世界綱領」で「中進国」として例示されていた諸国——「スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国」——の共産党は、二九—三〇年にかけて一斉に戦略再検討を行ない、ほとんどの国で「中位b型」戦略を「選択」する。わが国の「三一年政治テーゼ草案」も、実はその一環なのであった。

(1) 以上について、前掲拙稿「コミンテルンの綱領問題」特に四、四九四—五一〇頁、参照。また、K. E. McKenzie, *Communism and World Revolution*, London/New York 1964, pp. 68-83.

(2) Kato: *Einige politische und organisatorische Aufgaben der KP. Japans, in, Die Kommunistische Internationale (im folgenden KI)*, IX. Jg. H. 42 (17. Okt. 1928), S. 2561. 訳文は『現代史資料』第一四巻二九六頁の伏字をドイツ語テキストから補った。傍点、引用者。

(3) 佐野学第一〇回予審迅問調査(一九三〇年一月二四日)、『現代史資料』第二〇巻、二七一—二七二頁。

(4) 同右第九回迅問調査(三〇年一月二三日)、同右書、二五〇—二五一頁。同第一二回迅問調査(三〇年一月二七

日)、同右書、二八一頁。また、『プロレタリア科学』臨時増刊、一九三一年一〇月、五二—五三頁をも参照。

(5) 猪俣「プロレタリア戦略論——その中心問題を究明す」、『中央公論』一九三〇年五月)、『横断左翼論と日本人戦線』、而立書房、一九七四年、二二—五頁以下。傍点、引用者。なお、社会経済研究所編『日本民主革命論争史』、伊藤書店、一九四七年、七三頁以下、をも参照。

(6) 横瀬毅八(対馬忠行)、『ブルジョア民主革命に於けるプロレタリアートの社会主義的任務に就て——我国に於けるその特殊性』、『プロレタリア科学』一九三〇年三月、一一—一二頁。なお、佐野袈佐美「ロシアに於るブルジョア民主主義革命のプロレタリア革命への転化の過程」、『プロレタリア科学』一九三〇年一月、四〇頁以下、をも参照。

二 「中進国」における「中位b型」の擡頭

——ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国の場合

「世界綱領」は、コミンテルンにおいて、「帝国主義とプロレタリア革命の時代における『共産党宣言』⁽¹⁾」「革命的階級闘争の『勝利の科学』⁽²⁾」などと自画自讃された。それは、一九二一年に問題が生起してから二八年九月の

採択にいたる全時期をブハーリンが主導してきたものであったが、採択直後の「右翼的偏向との闘争」でブハーリンが失脚して後も、二九年一月のスターリン五〇歳の誕生日を機に「共産主義インタナショナル綱領の作成に対する同志スターリンの指導的役割と直接的参与」という『歴史の偽造』がおこなわれることにより、『権威』を保ち、ソ連邦共産党第一六回大会（一九三〇年六月七月）のころには、世界の二三カ国語に翻訳され、レーニン起草のソ連邦共産党綱領（一九一九年）さえ、この「世界綱領」にもとづき改訂されようとしたのであった。⁽⁴⁾

したがって、「世界綱領」に定式化された革命類型論が、各国支部に各国共産党を拘束し、その旧来の戦略方針の再検討をうながしたのは当然であった。そして、その再検討の方向は、当時のコミンテルンの「第三期革命的高揚」論にもとづく「社会ファシズムとの闘争」革命的誘引され、「左翼主義と図式主義」⁽⁵⁾を強化する方向であったこともいうまでもない。「先進国」における典型例は、イタリア共産党における「リヨン・テーゼ」の廃棄——「労働者農民委員会にもとづく共和議会」という「中間的解決」から、「直接プロレタリア独裁」へ

(一九二九年)——であったが、「中進国」においては、その「左翼主義と図式主義」は、一九二九年—三一年春にかけて、ほとんどの国々の共産党が、二八年以前の戦略路線を清算し、「中位b型」即ちプロレタリア革命論を採用する傾向として現われる。いうまでもなく、わが国の「三一年政治テーゼ草案」もその一環であった。以下では、「世界綱領」で「中進国」と例示された諸国について、それぞれを略述する。

〔ポーランド〕 ポーランド共産党の戦略問題は、第六回世界大会議場での「中進国」討論の中心であり、ポーランドが、①社会主義ソ連邦や「先進国」ドイツの隣国であること（マジヤール）、②「封建遺制」が「一九一七年までのロシア」に比すれば強大でなく、農業資本主義が進んでいること（多数派ブランド、少数派リンク、ドイツ共産党デンゲル）、③ピルスツキ独裁は、「民主主義段階からファシズムに到達」しており、ファシズムにはプロレタリア独裁が対置されるべきこと（デンゲル）、などの理由により「中位b型」とされたことが、そもそも「中進国革命」戦略をa型とb型とに分岐させた発端であった。この意味では、すでにポーランドのプロレタ

リア革命戦略は確定しており、「中位b型」の典型国であった。⁽⁷⁾

しかし、ポーランド共産党内の多数派(右派、ワレスキ、ワレツキ、コストラツェヴァ、ブラントラ)と少数派(左派、レンスキ、リンクラ)の対立が、ソ連邦共産党内のブハリン—スターリンの対立にまきこまれ、レンスキ指導部が確立されていく二九—三〇年の「右翼的偏向との闘争」過程で、旧多数派(右派)は、二〇年代半ばのブルジョア民主主義革命時代の「残滓」を浴びたものとして批判され、「ファシスト革命の前にその『民主主義的発展の綱領』を実現しようと試みているかのような小ブルジョアジーの役割に関する未だ克服されていない見解」ゆえに失脚していく。こうして、一九三〇年九月のポーランド共産党第五回大会は、一九二一年に総人口の七六%、三〇年代にもなお六三%が農業に従事し、西ウクライナ、西白ロシアの農業問題・民族問題をもかえこんだこの国で、「中位b型」戦略を確定し、それにもとづく「綱領草案」を提示した。⁽⁸⁾

「ハンガリー」ハンガリー共産党は、よく知られているように、ロシア革命に続く直接的革命情勢期(一九一

九年)に、ペラ・クンを首班としたハンガリー・ソヴェト共和国を短命ながら樹立した経験を持つ。一九一八年の敗北後、共産党は一時解体し、二五年八月の再建第一回党大会以後、かつてのハンガリー革命が労農同盟の基盤を持ちえなかった教訓をもとに、「労働者農民政府を先頭とした共和国」のスローガンをかかげてきた。⁽⁹⁾

当時のハンガリーは、大土地所有を残し数百万の零細農・土地なし農民を抱え総人口の半数が農業に従事するホルティ摂政(ベトレン政権下の君主制国家であり、第六回世界大会議場でもとりたてての討論もなくハンガリーが「中進国」と例示された時、かのG・ルカーチは、「第六回世界大会で採択された『世界』綱領は、ハンガリーを、きわめて正当にも、プロレタリア革命への移行に際して民主主義的独裁が決定的な役割を演ずるような国家のひとつに加えている」と「中位a型」としての解釈を示し、いわゆる「ブルム・テーゼ」を執筆した(二八年末)。⁽¹⁰⁾

しかし、この「ハンガリー(中位a型)」という「ブルム・テーゼ」の解釈は、ハンガリー共産党在外指導部とコミンテルン執行委員会から厳しく反撥される。二九年

三月の『KI』誌は、ハンガリー革命一〇周年を記念し、ベラ・クン、マジヤールらが、一九一九年のハンガリー革命は、「社会主義建設に必要最小限の生産力発展」「封建遺制は残っているが農業資本主義化も比較的高い水準」「多少とも組織的で階級意識をもった農業労働者のかなりの存在」があったゆえに、「ブルジョア民主主義革命の完遂の任務を伴ったプロレタリア社会主義革命であった」と断定した⁽¹³⁾。即ち、一九九年のハンガリー革命は、「中位b型」の歴史的、典型とされたのである。

したがって、一九九年革命がすでに「中位b型」としてたたかわれた以上、二九年の革命課題がそれより「低い段階」である「中位a型」ではありえない。「ブルム・テーゼ」から一年後、二九年一月にコミンテルン執行委員会は、「ハンガリー共産党員にあてた公開状」を発し、「ハンガリーにおける第三期」が、「重要な封建遺制を残しつつも……国の経済機構がひとつの農工業型に発展」「封建遺制をファシズム的権力機構に組みこむことによってファシズム的権力機構が拡充」「労働組合および社会民主党のファシズム化」を引きおこしているとして、ハンガリー革命を「中位b型」と明示し、「ブルム・

テーゼ」を「左翼的發展の過小評価」と退ける⁽¹⁴⁾。翌三〇年二―三月のハンガリー共産党第二回大会は、この戦略を確立し、「ブルジョア民主主義革命理論を清算」する⁽¹⁵⁾。「バルカン諸国」「中進国」として例示されている「バルカン諸国」とは、一九二〇年に結成されたバルカン共産主義者連盟加盟諸国の国々を指し、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ギリシャ、ルーマニアのことである。これらの国々は、ギリシャで五〇%、ユーゴスラヴィア七五%、ルーマニア七八%、ブルガリアで八〇%の農業人口をもち、複雑な農業・土地問題と民族問題を内包し、ギリシャ以外は君主制であり、帝国主義列強のはざまで不安定な政治状況にあった⁽¹⁶⁾。第六回世界大会直後には、これらの国々は、さしあたり、ディミトロフが次のように特徴づけた、未分化の段階にあった。

「バルカンでのブルジョア民主主義革命は、ヨーロッパでの先例と同じように展開し完了することができなかった。封建制はセルビアとブルガリアでは完全に、ギリシャではその大部分が廃絶された。……しかし、農業問題は、バルカン全体（ルーマニア、アルバニア、マケドニア、トラキア、そして部分的にはギリシャ）と

してみれば最終的には解決されなかった。バルカンの民族問題も、また未解決のまま残された。……バルカンの民族革命は、プロレタリア革命の一構成要素または要因の一つであるか、あるいは遅かれ早かれプロレタリア革命に成長転化していくプロレタリアートおよび農民の民主主義的独裁という形をとったブルジョア民主主義革命の構成要素であり、要因の一つである。⁽¹⁷⁾

ここでも示唆されているように、バルカン共産主義者連盟の中心であるブルガリア共産党は、すでに第六回世界大会議場での討論で、ブルガリアでは「ブルジョア民主主義革命は半世紀前に終っている」(コロコフ)という理由で、「中位b型」を主張していた。⁽¹⁸⁾

しかも、バルカン諸国の政治的反動化を、コミンテルンは、おおむね「ファシズム」と規定していた。そのさい、「バルカンのファシズム」は、①「イタリヤやポーランドにみられることとは反対に、このファシズムが大衆運動として下から権力を奪取するのではなく、反対に上から、ブルジョアジーの軍事力によって支持され、金融資本の指揮のもとに統一された国家機構から発し、ブルジョアジー、大地主、富農、小ブルジョアジーの上層

部——官僚——というすべての反革命勢力から発していること」⁽¹⁹⁾「上からのファシズム」「軍事ファシスト独裁」、②「肝心な点は、ポーランドとかユーゴスラヴィアに独占がほとんど発展していないということではなく、これらの国々が国際資本の独占的諸団体と緊密に結びついており、国際資本がそれらの国々の対内・対外政策の基本を指示しているという事実」⁽²⁰⁾「従属ファシズム」という特徴づけを伴っていた。

そして、バルカン地域は、初期コミンテルンの統一戦線戦術の時代に「労働者農民政府」スローガンに最も適合的な地域に数えられ、⁽²¹⁾各国支部はこのスローガンで「相対的安定」期をたたかってきたが、「世界綱領」ではこのスローガンは「発達した資本主義国ではプロレタリア独裁の同義語、後進諸国や多くの植民地諸国ではプロレタリアートと農民の独裁の同義語」と注記され、⁽²²⁾同じ「中進国」であるハンガリー共産党は、先のコミンテルン「公開状」で、「労働者農民政府がプロレタリア独裁の同義語であることを忘れた」誤りを批判されていた。

これらの条件が重なって、バルカン諸国共産党は、一九三〇年には、すべて「中位b型」戦略を「選択」ない

し「適用」する。

すでに第六回世界大会で「中位b型」を主張したブルガリア、共産党は、党内抗争と結びついて、ボリス国王下の右派連立政権を「ファシズム独裁」と規定し、「中位b型」戦略の武装蜂起をめざす。即ち、党創立以来の幹部であるコロコフ、デイミトロフらもすでに「中位b型」をある程度認めていたが、二九年五月の第二回中央委員会総会で、コロコフ、デイミトロフらがモスクワ指導部をコミンテルン執行委員会にたなあげしたまま、イスクロフ、ボイコフら、共産青年同盟を指導してきた若い「左翼主義者」たちが国内党指導権を確立する。コロコフはモスクワで、デイミトロフはベルリンの西欧ピュローで、それぞれコミンテルン執行委員会の重要な仕事に従事しながらも、自国ブルガリアの国内への指導は貫徹しえない状態が、三四年のデイミトロフのコミンテルン執行委員会幹部会への大抜擢まで続くことになる。⁽²³⁾

ユーゴスラヴィア、共産党の場合、二八年末の第四回党大会で、一旦「中位a型」戦略をかかげた。即ち、農業における半封建遺制の残存とブルジョア民主主義革命の未完成を主たる理由として、「大セルビア・ブルジョ

アジ」とその君主制のヘゲモニーにある主敵」に対し「プロレタリアートと農民の民主主義的独裁の同義語としての労働者農民政府」を対置した。⁽²⁴⁾

ところが、その直後の二九年一月のクーデタでアレクサンダー国王の個人独裁が樹立され、二二年憲法廃止、議会解散、全政党禁止という事態にいたると、コミンテルンは、はじめ、これを「絶対主義的君主制」「絶対主義的軍事独裁」「野蛮でアジアの方策を伴う軍事独裁」「軍事的王朝的独裁」などと特徴づけた⁽²⁵⁾が、次第に「大セルビア的ファシズム軍事独裁」「軍事ファシスト独裁」⁽²⁶⁾規定が支配的になっていく。この時期にはなお「ブルジョア民主主義革命の未完成」「封建遺制」が留意され、二九年七月のコミンテルン第一〇回執行委員会総会マヌイルスキー報告は、ユーゴスラヴィアの「ファシズムは、独特の、半封建的君主制的性格をおびている」と指摘した。⁽²⁸⁾

しかし、一九三〇年に入ると、国家形態規定はほぼ「軍事ファシスト独裁」に一元化され、ユーゴスラヴィア共産党自体が弾圧による指導者喪失のほか、激しい分派闘争を伴う混乱により、「大衆から孤立」したまま「直

接的行動スローガンとして武装蜂起をかかげる」一揆主義で、自滅していく。

ルーマニア共産党の場合も、二八年一二月段階では、「ルーマニアにおけるブルジョア民主主義革命の完成とその勝利的社会主義革命への更なる発展」をめざしていた。⁽³⁰⁾二七年七月のフェルディナンド国王の死に伴う政治的空白下で、二八年一月に王党派||自由党から急進派||民族農民党への政権交代が行なわれた局面である。

しかし、二九年の「右翼的偏向との闘争」過程で、ルーマニア共産党は、民族農民党マニウ政権を「国際金融資本の命令によって……民主主義的仮面のもとに、社会ファシストの積極的援助をうけて、プロレタリアート、農民、被抑圧諸民族に対する野蛮なファシスト政権を日ましに強化している」と把える。⁽³¹⁾

そして、三〇年六月、前皇太子カロールが突然帰国し王位に就き宮廷政治にのりだすと、コミンテルンとルーマニア共産党は、これを反ソ戦争を企図するフランス帝国主義を後ろ楯にした「軍事的君主制的ファシスト独裁」「公然たるファシスト独裁」ととらえ⁽³²⁾、ティモフ、タドロフらの指導のもとに、「ルーマニアが直接プロレタリ

ア革命に直面している」という「中位b型」戦略が採られることになる。⁽³³⁾

ギリシャにおいても、一九二〇年代—三〇年代初めの政治的争点は「王党派と共和派の紛糾」⁽³⁴⁾であったのだが、軍隊の支持をとりつけた共和派ヴェニゼロス政権を、ギリシャ共産党は「民主主義的」マスクをつけたファシスト独裁の準備」ととらえ⁽³⁵⁾、後に自己批判される「ギリシャにおける革命のこの「民主主義的」段階を無視し、ギリシャにおいて直接社会主義革命を宣言した一九三〇年の中央委員会の誤った決議」が採択される。⁽³⁶⁾

(1) 以下の注記では、紙数の関係で、筆者「Internationale-*Presse-Korrespondenz* (im folgenden *Imprekor*)」KI、巻の巻号数、年月日、頁数のみを注記し、論文名等を挙げることは省略する。P. Reinmann, *Imprekor*, 8. Jg. Nr. 92 (28. Aug. 1928), S. 1723.

(2) *Agitprop. des EKKI, Imprekor*, 9. Jg. Nr. 21 (5. März 1929), S. 450.

(3) D. Manniski, *Imprekor*, 9. Jg. Nr. 119 (31. Dez. 1929), S. 2795.

(4) W. Molotow, *Imprekor*, 10. Jg. Nr. 98 (11. Juli 1930), S. 1327. 邦文『インタナショナル』第四巻第一〇号(一九三〇年八月)、二七頁。

- (5) B・レイノン/K・シリーニヤ(石堂清倫訳)『現代革命の理論——ロマンチズムの政策転換』合同出版一九六六年、五八一—五九頁。
- (6) 前掲拙稿「ロマンチズムの綱領問題」(註)五〇〇頁以下。
- (7) 同右、特に⑤の二三頁以下、参照。
- (8) ZK d. KP Polens, *Imprekorr.*, 9. Jg. Nr. 59 (9. Juli 1929), S. 1422-23.
- (9) *Imprekorr.*, KI, 6. 邦訳『ポーランド関係論文その他』M. K. Dzievanowski, *The Communist Party of Poland*, 2. ed., Cambridge 1976. J. B. de Weydenthal, *The Communists of Poland*, Stanford 1978. J・レ・マンチャ「函大戦間期におけるポーランド共産党の悲劇」『山西英一・鬼塚豊吉訳』『ローニン伝』の序章「その他」岩波書店一九七二年。H. Seton-Watson, *The East European Revolution*, London 1950. G. D. Jackson, Jr., *Comintern and Peasant in East Europa 1919-1930*, New York/London 1966.
- (10) *Die Kommintern vor dem 6. Weltkongress*, Hamburg 1928, S. 262. M. Mohr, *A Short History of the Hungarian Communist Party*, Boulder 1978, p. 28.
- (11) 英国王立国際問題研究所編(仙波太郎訳)『ヒトマンの政治経済』清和書店一九三九年、一二五頁以下。矢田俊隆『ハンガリー、チェコスロヴァキア現代史』山川出版社一九七八年、九二頁以下。
- (12) G. Lukacs, *Demokratische Diktatur* (hrsg. v. F. Benseker), Darmstadt/Neuwied 1979 [邦訳『ナカール初期著作集』第四巻「三一書房」一九七六年】。
- (13) Bela Kun, L. Magyar, *KI*, X. Jg. H. 13 (27. März 1929), S. 745ff.
- (14) Offener Brief an die Mitglieder der KP Ungarns, *KI*, X. Jg. H. 44 (13. Nov. 1929), S. 1656-65.
- (15) KP Ungarns, *Imprekorr.*, 10. Jg. Nr. 78 (16. Sept. 1930), S. 1949-50.
- (16) 英国王立国際問題研究所、前掲書、木戸義『ヒトマン現代史』山川出版社一九七七年。H. Seton-Watson, *op. cit.*
- (17) G. Dimitrow, *KI*, IX. Jg. H. 43 (24. Okt. 1928), S. 2625-28 [邦訳『ヒュームロン選集』第一巻「二五四—二五七頁」】。
- (18) 前掲拙稿「註」二三〇—二三二頁。
- (19) ヒュームロン「ヒトマンにおけるソシアリズム」(一九二九年三月一五日)『邦訳『ヒュームロン選集』第一巻「二六六頁」】。
- (20) Manniski (X. Plenum des EKKI), *Imprekorr.*, 9. Jg. Nr. 79 (20. Aug. 1929), S. 1872-73.
- (21) *Protokoll des Vierten Kongresses der KI*, Hamburg 1923, S. 1017 [村田陽一編訳『ロマンチズム資料集』第二

- 巻「二六〇頁」° *Protokoll der Konferenz der Erweiterten EKKI*, Hamburg 1923, S. 283 (「四」 四「三」頁)°
- (22) 前掲雑誌「四」 二六三—二六四頁。
- (23) J. Rothshild, *The Communist Party of Bulgaria*, New York/London 1968, chap. XII. N. Oren, *Bulgarian Communism*, New York/London 1971, chap. II. 英訳『ブルガロンの歴史』第三巻「二一九—二四〇頁」。
- (24) B. Boschkowitsch, *KI*, X. Jg. H. 4 (23. Jan. 1929), S. 197-199.
- (25) EKKI, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 11 (5. Feb. 1929), S. 202. B. B.—witsch, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 4 (11. Jan. 1929), S. 73. B. B.—witsch, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 10 (1. Feb. 1929), S. 175.
- (26) Kommunistische Balkanföderation, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 39 (7. Mai 1929), S. 930.
- (27) *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 119 (31. Dez. 1929), S. 2775.
- (28) Manujski (X. Plenum des EKKI), a. a. O., S. 1873.
- (29) *Die KI. vor dem VII. Weltkongress*, Moskau/Leningrad 1935, S. 402-403.
- (30) G. Dimitrow, *Imprekorr*, 8. Jg. Nr. 137 (7. Dez. 1928), S. 2728.
- (31) S. Horia, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 109 (22. Nov. 1929), S. 2580.

- (22) KP. u. KJV. Rumäniens, *Imprekorr*, 10. Jg. Nr. 53 (24. Juni 1930), S. 1186.
- (23) Horn, *KI*, XIII. Jg. H. 7 (10. April 1932), S. 550. *Die KI. vor dem VII. Weltkongress*, S. 408-409.
- (24) 英國王室國際問題研究所「前掲報告」一九二九。
- (25) Kommunistische Balkanföderation, *Imprekorr*, 10. Jg. Nr. 6 (17. Jan. 1930), S. 100.
- (26) *Die KI. vor dem VII Weltkongress*, S. 420.

III 「中進国」をさける「中位D型」の擡頭

——スペイン・ポルトガルの場合

「スペイン」スペインは、かつてマルクスが、一九世紀の五次にわたる革命の過程で、「すべての封建諸国家のなかで最初に、しかも最も純粹なたちで絶対君主制が成立」しながら「中央集権化が一度も根をおろすことができ」ず、「ヨーロッパの絶対君主制一般と表面だけは似かよっているが、むしろアジア的統治形態と同一の部類に入れるべき」と特徴づけた国である。⁽¹⁾

一三年九月にイタリア・ファシズムの政權掌握の影響を受けてクーデタにより成立したプリモ・デ・リヴェラ將軍の独裁を、小党スペイン共産党は、第六回世界大会

前後には「ファシズム独裁」⁽²⁾と規定し、「軍事独裁」⁽³⁾規定と併用していた。二九年八月の第三回党大会は、「右翼的偏向との闘争」を強調し、「君主制打倒」を主要スローガンに共和制樹立をめざすスペイン社会党を、「社会ファシスト」として当面の主要敵としたが、同時に、「スペインには、すべてのヨーロッパ諸国の中で最も遅れた経済形態と封建的諸関係が、近代的資本主義的経済形態と併存している」という認識をもとに、一応「中位a型」戦略による「労働者農民政府」スローガンをかけ、「絶対主義的神権的軍事的君主制を夢見るあらゆる半封建的勢力——君主制、軍国主義者、貴族層、聖職者」との闘争も顧慮していた。⁽⁴⁾

しかし、世界恐慌のスペインへの波及の中で、国王アルファンソ一三世や軍部から孤立したプリモ・デ・リヴェラ將軍が三〇年一月に失脚・退陣してベレンゲル政府に移行すると、コミンテルン内では、この「独裁の危機」をめぐって異なるニュアンスが現われる。

ソ連邦共産党機関紙『プラウダ』は、「資本主義政権内の新しいグループ化」とあっさり片づけ引き続き「労働者農民政府」スローガンとスペイン共産党の「多数者

獲得」の必要を説いたが、⁽⁵⁾ドイツ共産党機関紙『ローテ・ファーンネ』は、スペインを「世界ファシズムの最も弱い環」と注目し、「プリモ・デ・リヴェラの失脚は、ファシスト独裁政治の完全な破産の第一の実例」「スペインの実例は、ファシスト独裁から民主主義への復帰はありえないこと、ファシズムを力により打倒しうる唯一の勢力は、労働者階級でありプロレタリアートの独裁であることを証明した」と断定する。⁽⁶⁾

この問題は、三〇年二月のコミンテルン執行委員会拡大幹部会会議でもとりあげられる。マヌイルスキーの主要報告は、「スペインがプロレタリア世界革命の運命を決めるわけではない」と簡単にふれたのに対し、エルコリ〔トリアッティ〕は、「革命的高揚の不均等発展」の視角からもっとスペインに注目すべきだ、と述べた。これに対するマヌイルスキーの回答は、「共産党とプロレタリアートが何ら指導的役割を果たしていないスペイン型の『革命』よりは、個々の部分的ストライキの方が国際労働運動にとっては大きな意義を持つ」というものであった。⁽⁷⁾ただし、翌年の共和制への移行(三一年四月革命)によって、マヌイルスキーは、あらためてスペインにと

りわけ注目し、後の第七回世界大会に通じる「ファシズムがプロレタリア独裁のみによっておきかえられるわけではなく、ブルジョア民主主義によってもとってかわられうる」という発想を導き出すのであるが。

こうして、コミンテルンから何らの重要な指導を与えられないまま、当のスペイン共産党の側は、この拡大幹部会総会直後のパンプロナ党協議会で、スペインの「革命的情勢」を確認し、党内の一部に残る「民主主義的支配への到達という幻想」を「右翼的偏向」として退け、国内の現実政治が「君主制存続か共和制への移行か」をめぐり激動しているさなかに、「共産党の独自の指導的役割」を「証明」するために、「第三の解決策」として「プロレタリア独裁」をめざす武装蜂起の準備に入り、三一年四月一二日の総選挙により共和派が勝利しアルファンソ一三世が国外に亡命するという『無血共和革命』の決定的な局面において、大衆から全く孤立したまま、「共和制打倒」スローガンしか掲げえないという悲劇的な結末を迎える。⁽⁹⁾

三一年四月にはじまる「中進国革命」論の次の局面——いくつかの国々での「中位a型」の復活ないし確立

——において重要な役割を果たすのは、このスペイン共産党の悲喜劇の教訓であった。

〔ポルトガル〕 同様な傾向は、一九一〇年の共和革命後に幾度もクーデタがくり返され、スペインと同じく後進的経済構造を持つポルトガルにおいても、見出された。ポルトガル共産党は、二六年五月の軍事独裁樹立から三年のサラザール政権樹立にいたる過程を「イギリス帝國主義に従属したファシズム独裁」と捉え、後に自己批判されているところによると、「党は、ポルトガル革命の性格について正しい立場をとることができず、国の後進性や封建遺制の多様な諸形態を顧慮することなく、長年にわたってプロレタリア独裁のスローガンをかかげてきた」のであった。⁽¹¹⁾

以上に概観してきたように、一九二八年九月のコミンテルン「世界綱領」で「中進国」と例示された諸国の共産党は、一九二九年から三一年春にかけて、コミンテルンのいわゆる「第三期」革命の高揚論が世界恐慌勃発によりいよいよ高調してくるなかで、また、「右翼的偏向との闘争」により何らかの「民主主義」闘争に言及す

ることが直ちに「日和見主義」と断罪されかねない「鉄の規律」にもとづく「世界政党」への「権威的盲従」の雰囲気の中で、そのほとんどが「中位b型」戦略な「プロレタリア独裁」スローガンをかかげることになる。このことは、三一年四月のスペイン革命勃発の後、三一年夏のコミンテルン執行委員会幹部会クーシネン報告で、ようやく批判的に言及されることになる。

「コミンテルン綱領は、スペイン、ポーランド、バルカン諸国等のような国々における革命の性格について、きわめて慎重に述べている。即ち——『これらの国々のあるものでは、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への多かれ少なかれ急速な転化が可能であり、また他のものでは、ブルジョア民主主義的性質の任務を広範に伴うプロレタリア革命の型が可能である。』

これらの国々のどこにおいてどちらの革命類型に直面しているかは、述べられていない。『ところが』これらの国々の共産諸党においては、革命の性質をおしなべて社会主義革命と千編一律に規定する傾向が、きわめてしばしば現われている。⁽²³⁾

(1) Karl Marx-Friedrich Engels-Werke, Bd. 10, S. 439—440.

(2) 例えば Yencovi, *Imprekorr*, 8. Jg. Nr. 16 (17. Feb. 1928), S. 345. 又は 斉藤孝編『スウェーデン・ボネト

ガル現代史』山川出版、一九七九年、同『スウェーデン内戦の研究』第1編、中央公論社、一九七九年、G・ブレナン(鈴木隆訳)『スウェーデンの迷路』合同出版、一九六九年、H・トマス(都築忠七訳)『スウェーデン市民戦争』I、みすず書房、一九六二年、参照。

(3) *Die Komintern vor dem 6. Weltkongress*, S. 300.

(4) M. Garlandi, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 80 (20. Aug. 1929), S. 1904. Mont-Fort, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 13

(8. Feb. 1929), S. 47. K. P. Spaniens, *Imprekorr*, 9. Jg. Nr. 86 (6. Sept. 1929), S. 2100. G・トントリ編

(秋山・石井・藤江訳)『スウェーデンにおける戦争と革命』第一巻、青木書店、一九七三年、三六一—三七頁。

(5) Prawda, *Imprekorr*, 10. Jg. Nr. 13 (4. Feb. 1930), S. 306.

(6) Rote Fahne, *Imprekorr*, 10. Jg. Nr. 11 (31. Jan. 1930), S. 247.

(7) Erweitertes Präsidium des EKIKI, *Imprekorr*, 10. Jg. Nr. 37 (29. April 1930), S. 839. F. Claudin, *The Communist Movement*, Penguin 1975, pp. 210 ff.

(8) R. Flores, *Imprekorr*, 10. Jg. Nr. 25 (14. März

1930), S. 606-607.

(6) *KI*, XII, Jg. H. 17/18 (7. Mai 1931), S. 731.

(9) *G. Péri, Impérialisme*, 11. Jg. Nr. 34 (14. April 1931), S. 873.

(11) *Die KI. vor dem VII. Weltkongress*, S. 306-307.

(12) O. W. Kuusinen, *KI*, XII, Jg. H. 27 (23. Juli 1931), S. 1222.

四 「中位b型」としての「三一年政治テーゼ草案」

かくして、一九三〇年半ばには、日本は、「世界綱領」中の「中進国」とみなされ、しかも、その「中進国」と例示された諸国の共産党は、おしなべて社会主義革命戦略Ⅱ「中位b型」を採っていた。猪俣流にいうならば、スペイン、ポルトガルのような国においてさえ、である。三〇年八月のプロフィンテルン第五回大会後に設置されたコミンテルン日本委員会の新テーゼ草案が、サファロフ、ヤ・ヴォルク共に「中位b型」であったのは、当然であった。このうちヤ・ヴォルク草案の内容が紺野与次郎、風間文吉の帰国に際し持ちこまれ、翌三一年一月から、日本支部Ⅱ日本共産党は「ブルジョア民主主義

的任務を広い範囲で抱擁するところのプロレタリア革命」を戦略にかかげ、四—六月には「三一年政治テーゼ草案」を発表する⁽¹⁾。

猪俣津南雄は、この日本支部Ⅱ日本共産党の戦略転換に、論争勝利を宣言し⁽²⁾、「戦略的正統性」が「国際的權威」によりくつがえされた『プロレタリア科学』の側は、野呂栄太郎さえもが「組織的正統性」のレベルで反論せざるをえない局面を迎える。そして、『赤旗』紙上では、次のようにして「二七年テーゼ」も清算される。

「一九二七年七月テーゼ起草の当時であっても……今日の規定〔中位b型〕が正しい規定であって『ブルジョア民主主義革命からプロレタリア革命への急激な転化』と云ふ規定は正しくない。何となれば、国家権力は一九二七年から一九三一年の間に一の階級から他の階級に移っただろうか。何人も言下に否と答へざるを得ぬ。……コミンテルン第六回大会がこの規定〔中位b型〕に到達したことはコミンテルンのマルクスⅡレーニン主義的偉大さをも一度明白に吾々に示したものであつて実に画期的事件ではあるまいか⁽⁴⁾。」

しかし、この『国際的權威への忠誠』は、いま一度裏

切られることになる。コミンテルンの側は、一九三一年春から夏にかけて、とりわけスペインにおける「無血革命」(三一年四月)の経験にかんがみて、「中進国革命」戦略の全般的再検討に入り、一九三二年には、スペイン、ポルトガル、ルーマニア、ギリシャ、ユーゴスラヴィアにおいて、「中位a型」が復活される。また、「中位b型」に留まるポーランド、ハンガリー、ブルガリアについても、その「ブルジョア民主主義的性質の任務を広範に伴う」ことが強調される。日本についても、その一環として、三一年九月の満州事変勃発時には「三二年テーゼII中位a型」の方向が明確になる。『赤旗』が、「三一年政治テーゼ草案」にもとづき「立憲君主制」や「ファシズム独裁」を真剣に討論しているころ、コミンテルンの側は、スペインにおいて崩壊したプリモ・デ・リヴェラ独裁体制を「半絶対主義的半封建的君主制」と再解釈し(三二年秋、第一二回執行委員会総会ウルタド演説)、ルーマニア共産党には「半封建的帝国主義的君主制」(第五回党大会、三二年初頭)、日本の天皇制については、かつて二九年のユーゴスラヴィアにも与えたことのある「絶対主義的君主制」(クレーシネン幹部会報告、

三二年三月)規定を与える。

わが国論壇の『中進国論争』は、コミンテルンにおける、一九二九—三一年春の「中位b型」の擡頭、三二年春—三二年の「中位a型」一部復活、の後を追いかけるがら、三二年五月の「三二年テーゼ」発表(邦訳は七月)によって、ようやく本格的な『日本資本主義論争』『封建論争』へと、転変していくのであった。

(1) 以上について、五十嵐前掲論文の他、風間丈吉『非常時』共産党、三一書房、一九七六年、紺野与次郎『嵐の中の青春』(『前衛』一九七九年一月)、山本正美『激動の時代に生きて』(『労働問題研究』一九七八年一月)、参照。

(2) 猪俣「マルクス主義の前進のために——批評家一氏への反批判」、『改造』一九三一年四月、前掲書、所収。

(3) 野呂栄太郎『没落への』転向期に立つ理論家——猪俣氏の『反批判』の再批判』、『中央公論』一九三一年五月、『野呂栄太郎全集』下巻、新日本出版社、一九六七年、所収。

(4) センバンコウ生「一九二七年七月テーゼの問題に就いて」、『赤旗』一九三一年一月一日。

(一橋大学専任講師)